

医療現場も風化懸念

阪神大震災 医師7人経験語る

1995年の阪神大震災直後に被災者の治療に当たった医師7人が当時の経験を語る講演会が14日、大阪市内であった。企画した大阪医科大の富岡正雄准教授は、医療関係者の間でも語り手が少な

なり記憶の風化が懸念されるとして「阪神大震災は日本の災害医療の原点。あの時何が起きたのかを改めて知ってほしい」と訴えた。

震災時は多くの患者が病院に押し寄せ、廊下で心臓マッサージをしたり、情報がなく他の医療機関への搬送に

ふれかえっていたという。水などのライフラインが途絶える中、長時間の圧迫で壊死した部分の毒素が体内に回る「クラッシュ症候群」の症状が出ていた患者や、検査ができず容体を確定できない患者らを別の病院に搬送する必要があった。途方に

暮れたが、消防署職員ら多方面の連携で連日、当時は想定していなかった大阪府内への搬送が実現した。当時の混乱を教訓に、現在では広域に医療機関の患者受け入れ可否などの情報を共有するシステムが整備されている。また当時、神戸大病院に勤めていた佐浦隆一医師は、断水で人工透析ができず「救える命を救えなかった」と悔しさで声を震わせながら話した。



阪神大震災直後に被災者の治療に当たった経験を語る整形外科医の長野正憲医師―大阪市内で